論文

若年女性における理想ライフコースの形成要因

大　日　義　晴

The Determinants of Young Women's Ideal Life Courses

Yoshiharu Dainichi

本稿の目的は、若年未婚女性における理想ライフコースの形成要因を検証することである。理想のライフコースのうち、「専業主婦」、「再就職」、「両立」の三つのライフコースを取り上げ、その形成要因として定位家族の影響に着目した。具体的には、①母親のライフコース（母親のライフコースをモデルとし、対応した性別役割分業規範を内面化する）の効果、②出身階層（階層が高いほど、性別役割分業に対して否定的な価値観を持ち職業的地位達成を志向する）の効果の二つに着目した。分析には、大学生（四年制）と看護専門学校生を対象に実施した調査票調査のデータを用いた。

多項ロジット分析より、娘の理想ライフコースを形成する要因として、母親のライフコースが効果を持つことが示された。本稿の分析から、母親のライフコースのうち、同じ就業であっても両立と再就職は質的に異なるものであり、娘の選好や規範意識に異なった効果を持つことが示唆された。

キーワード：理想のライフコース、母親のライフコース、若年未婚女性

1. はじめに

われわれの社会の変動をとらえるうえで、人々の価値や意識の変化が参照される機会は多い。とりわけ性別役割分業意識については、実態としての性別役割分業構造と同程度あるいはそれ以上に取り上げられる機会も多く、社会的関心も高いと言えるだろう。いわゆる性別役割分業意識の典型とされるのは、「夫が職業、妻が家事・育児」という分業構造について、個人の態度を問うものである。

この性別役割分業意識に類するものとして、希望する将来のライフコースを尋ねる方法が挙げられる。代表的な調査としては、国立社会保障・人口問題研究所が実施している「出生動向調査」が挙げられる。このうち、未婚女性（18～34歳）を対象とした、理想とするライフコース（ideal life course）に関する設問が該当する。最新の第14回調査（2010年）によると、最も割合が高いのは再就職コース（＝結婚し子供を持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ）で35.2％、次いで多いのが、両立コース（＝結婚し子供を持つが、仕事も一生続ける）で、30.6％、つづいて専業主婦コース（＝結婚し子供を持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない）で、19.7％となっている。その他、非婚就業コース（＝結婚せず、仕事を一生続ける）が4.9％、DINKSコース（＝結婚するが子どもは持たず、仕事を一生続ける）が3.3％となっている。なお、第9回調査（1987年）から第14回調査（2010年）までの二十数年間における趨勢から、未婚女性（18～34歳）の理想とするライフコースの変化を確認すること

ができる。1980年代までは、未婚女性が希望するライフコースは、専業主婦コースを希望する割合が最も高かった。しかし1990年代に専業主婦コースが減って、両立コースが増えた。ただしその後は全体的な傾向に大きな変化はないと言える。

「出生動向調査」の興味深い点は、「理想」とするライフコースとともに、自分の将来として「予想」するライフコース（anticipated life course as possible outcomes）についても尋ねている点である。第14回調査（2010年）によると、予定ライフコースとして最も割合が高いのは再就職コース（36.1％）であり、両立コース（24.7％）、非婚就業コース（17.7％）、専業主婦コース（9.1％）、DINKSコース（2.9％）と続く。長期的な趨勢としては、専業主婦コースの減少が続いており、これに代わって両立コースと非婚就業コースの増加傾向が続いている。また、理想のライフコースを実現できると考えている、すなわち理想ライフコースと予定ライフコースが一致する割合は高まりつつあるが、約3分の2の女性が、理想とは異なる将来像を描いていることが指摘されている。例えば専業主婦を理想とする女性の8割以上が専業主婦にはなれないと予想している。同時に専業主婦になるだろうと予想している女性のうち4分の3は、理想のライフコースとは異なり「本意」とは言えないことが指摘されている（岩澤 1999）。

そもそも理想のライフコース、予定のライフコースとは、実質的に何を意味すると言えるだろうか。理想とは、実現可能な資源を保有していると仮定した上で、本人の規範意識にもとづいて決定される、将来のライフコースについての選好と定義されるだろう。また予定は現実の近似値であり、本人が保有する資源や環境要因によって決定されると考えられる。なお、理想も予定も、ともに現在と将来という前後関係を明示可能な点が特徴的である。一方、冒頭に取り上げた「夫は職業、妻は家事・育児」という規範意識については、規範意識と現実のいずれが先行するか判断することが困難である。これは、現実をもとに規範意識が再構成されることも当然想定されるためである。また、様々な意識調査においてこの項目を繰り返し目にすることによって、規範意識というよりは「社会的望ましさ」を回答しているとも考えられる。すなわち自分自身が実際に行動・選択する際の道標であるというよりは、自分の日常生活とは切り離された「社会にとってそうあるべき」事柄を回答していることも考えられる。以上から、性別役割分業意識とはそもそも何を尋ねている設問なのか曖昧な点も残る。この点で、今後結婚・出産に関連した就業の選択をおこなうであろう若年未婚女性に対して、「あくまでも理想は理想」として将来のライフコースを問うことは、規範意識に基づいて形成された個人の選好を同定する上で簡便な方法であると言えるだろう。当然現実的には、育児休業制度のあり方や男性の家事育児参加の状況から、就業の継続を断念せざるを得ないケース、逆に家計状況から再就労せざるを得ないケース等が想定されるため、女性のライフコースをめぐる社会的状況は一様ではない。

理想のライフコースに着目した研究課題としては、①特定の理想ライフコースを選択する規定要因、②理想と現実が一致／不一致するメカニズムの二つが挙げられる。理想と現実のあいだにギャップが生じる時、そのギャップは当事者にとって不満として経験されると想定できる。よって不一致が発生する社会的要因を明らかにすることが求められるとともに、女性の結婚や就業を阻害・抑制する要因を検討し、社会制度や環境要因の変革につながる政策的含意をもちうる研究が目指されるべきだろう。ただし方法論的な問題点として、厳密な意味で理想と現実の一致／不一致を確認するためには、同一個人を対象とした長期的

なパネルデータの利用が不可欠であり、実際に分析をおこなうことはきわめて困難である点が挙げられる。いずれにせよ、理想のライフコースと現実のライフコースそれぞれの特性を理解した上で、両者の比較検討をおこなうことによって、今日の女性のライフコースの実態と性別役割分業の構造を把握することが可能となるだろう。本稿では、これらの研究の手掛かりとして、上述の研究課題のうち前者に該当する、若年女性が理想とするライフコースが形成される要因について理解することを目的とする。

2. 理想ライフコースの形成要因とは？

理想のライフコース自体は幅広い対象を含みうるが、以下では出生動向調査にならい、若年未婚女性の理想のライフコースに限定する。なお理想のライフコースとして、出生動向調査において割合が高いもののうち、専業主婦コース、再就労コース、両立コースの三つのライフコースに限定して分析をおこなう。

理想のライフコースに影響を与える要因として、どのような要因が考えられるだろうか。既存の研究では母親のライフコース、母親の就業形態、父親の期待するライフコース、母親の期待するライフコースなどが、理想ライフコースを規定する要因として指摘されている（村松 1994）。よって本稿でも同様に定位家族の影響に着目する。

第一に、母親のライフコースの影響が考えられる。母親をロールモデルとして、就業および育児に関する価値・規範を内面化し、それぞれに対応したライフコースを志向すると想定される。この説明は、なぜ女性が家庭内ケア労働を担うのかという問いについて、幼少期以降の家庭内の価値内面化の影響を指摘したチョドロウやギリガンの研究と通底する（Chodorow 1978=1981; Gilligan 1982=1986）。また、母親のライフコースの影響は、青年期以降、すなわち現時点の母親との親密性を通じて強化されうる。結果として母親のライフコースを肯定的に評価し、自らも同一のライフコースを志向する、という説明が考えられる[1)]。

第二に、両親の階層の影響が考えられる。具体的には、両親の学歴、父親の職業などの社会経済的地位が高いほど、両親は性別役割分業意識に否定的であるため、結果として子も女性の労働市場への参加に対して肯定的で、よりリベラルな価値・規範意識を持つ可能性が高く、職業的地位達成に関する意識は強まると考えられる（木村 2000）。ただしここで注意すべきは、出身階層が高いほど母親が専業主婦である割合が高いことが想定される点である。結果として、出身階層が高いほど、娘本人の専業主婦志向も高い、という可能性も考えられる。これらのメカニズムについては慎重に検討する必要があると言えるだろう。

以上から、本稿で検討する仮説は以下の通りである。

【仮説 1】：母親が結婚・出産後に就労していると、娘の就労志向が高くなる。

【仮説 2】：出身階層が高いと、娘の就労志向が高くなる。

仮説 1 は、母親のライフコースが、理想の水準において世代間で再生産されることを示す仮説である。若年未婚女性にとっては、最も身近で重要な他者である母親が、ライフコース上のロールモデルとして捉えられており、母親のライフコースに相応して、理想のライフコースを形成することを意味する。仮説 2 は、出身階層の高さによって、娘の男女平等的な職業地位達成が促され、性別役割分業に否定的な意識が醸成されること意味する仮説である。結果として、娘本人は専業主婦であることよりも、就労（一貫就労と再就労を含む）

を含んだライフコースを志向することを意味する。

なお、三つの理想のライフコースは、職業的地位達成意識もしくは性別役割分業意識として、順序づけ可能な変数として操作化することも考えられるが、本稿では三つのライフコースが質的に異なることを前提とし、カテゴリカルな変数として用いる。

また前述の通り、理想のライフコースを規範意識に基づいた本人の選好であると定義するのであれば[2)]、本人の性別役割分業意識の規定要因についても同時に検討し、母親のライフコースおよび出身階層の影響を検証し、理想のライフコースと比較検討することが求められる。

3. データと方法

本稿では、「若年未婚女性の親子関係に関する調査」を分析データとして用いる。本調査は、2013年度日本女子大学人間社会学部社会福祉学科の演習科目である社会調査実習の一環として実施された。実施期間は2013年10月～2014年2月であり、実施場所はA女子大学（四年制）・B看護専門学校（三年制）である。調査の対象は、A女子大学の学部生（複数の授業の履修者）、およびB看護専門学校第1看護学科（1～3年）の学生のうち、未婚女性を対象に約453人程度を対象に行った。回答は授業時間中等におこなってもらい、その場で質問紙を回収した。非確率標本抽出であり、一人の学生が複数の授業を履修している場合もあるため、厳密な回収率は計算することができないが、A女子大学：257名、B看護専門学校：70名、計327人から回答を得た（72.2%）。なお本調査の実施にあたって、「日本女子大学ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会」の審査を受けた。

以下では、回答者のうち18歳以上23歳以下の回答者に限定し、さらに、将来結婚を「希望する」と回答した者のうち、将来子どもは「ほしくない」と回答した者をのぞいたサンプル（n=261）を使用し分析をおこなう。なお調査対象が大学生（四年制）と専門学校生であるため、中高卒の女性と比べると、もともと性別役割分業意識に否定的で、自身の職業的地位達成のために進学した者が多く含まれている可能性がある点については注意されたい。

被説明変数は理想のライフコースである。本調査では、「あなたの希望のライフコースは、以下のうちどちらですか」と尋ねており、選択肢は「1. 結婚・出産を機に退職し（産休育休は含まない）、その後は仕事をもたない【専業主婦タイプ】」、「2. 結婚・出産を機に退職し（産休育休は含まない）、その後再び仕事をもつ【子育て後再就労タイプ】」、「3. 結婚・出産にかかわらず、退職せずに仕事を続ける【一貫就労タイプ】」の三つである。以下では、出生動向調査に合わせて、それぞれ「専業主婦コース」、「再就職コース」、「両立コース」と表記する。

比較のため、性別役割分業に関連する規範意識を従属変数とした分析も併せておこなう。ここでは「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」、「子どもが3歳くらいまでは母親は育児に専念すべきである」の2つの項目を用いる。回答は「そう思う（=4）」から「そう思わない（=1）」まで四件法で尋ねており、これを連続変数として使用する。得点が高いほどそれぞれの規範意識がより高いことを示す。

独立変数については、まず母親のライフコースは「あなたの母親のライフコースは、以下のうちどちらですか」という設問を用いる。選択肢は、前述の本人の理想ライフコースとほぼ同じ三つのライフコースであり、これをそのまま用いる。出身階層については、父学歴を用いる。調査項目から、それぞれ「中学・高校卒」、「専門学校・短大

卒」、「四年生以上大学卒」の三つのカテゴリーを作成した。その他の統制変数としては、本人年齢、本人の所属学校、現在の居住形態、きょうだい数、父年齢、母年齢、母学歴を用いた。

学校別の記述統計量は表1に示す。理想のライフコースは、女子大については専業主婦コースが18.5％、再就職コースが40.7％、両立コースが40.7％となっている。看護専門については、専業主婦コースが8.9％、再就職コースが51.1％、両立コースが40.0％となっている。女子大の方が、10％程度専業主婦志向が高い（ただし学校間に有意差はない）。女子大および看護専門への進学は、中高卒後に就職する層に比べて、ともに職業的地位達成を志向する傾向が高いと言えるため、理想のライフコースに大きな差がないことには矛盾がない。なお、出生動向調査と比較するために、非婚就業コースとDINKSコースも含めて比較したのが表2である。これによると、女子大については非婚就業コースの割合が高く、また専業主婦志向も若干低いと言える。看護専門について見ると、専業主婦の割合が低い一方で、再就職および両立の割合が高く、就業志向が高いと言える。

なお、女子大と看護専門の間で有意差があったのは、父学歴、母学歴、父年齢、母年齢、母ライフコースである。このうち主要な独立変数である母ライフコースについて見ると、女子大においては専業主婦コースが35.2％、再就職コースが46.8％、両立コースが17.1％である。看護専門では専業主婦コースが8.9％、再就職コースが66.7％、両立コースが22.2％となっている。よって、女子大の方が看護専門よりも、母親が専業主婦である割合が有意に高い。また父学歴について見ると、女子大では中高卒が12.0％、短大専門卒が5.1％、大卒以上が73.6％となっている。看護専門では、中高卒が51.1％、短大専門卒が4.4％、大卒以上が26.7％となっている。女子大の方が看護専門に比して、父親が高等教育を受けている割合が高い。従属変数である本人の理想ライフコース、規範意識には有意差がない。よって本稿の分析では女子大と看護専門のサンプルを合わせて分析をおこなう。

以下では、まずそれぞれの仮説に対応した2変

表1　記述統計量

%

		女子大	看護専門	
本人の理想ライフコース	専業主婦	18.5	8.9	n.s.
	再就職	40.7	51.1	
	両立	40.7	40.0	
男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである	そう思わない	29.2	42.2	n.s.
	あまりそう思わない	41.7	40.0	
	まあそう思う	25.9	15.6	
	そう思う	2.8	2.2	
	DK/NA	0.5	0.0	
子どもが3歳くらいまでは母親は育児に専念すべきである	そう思わない	6.0	11.1	n.s.
	あまりそう思わない	28.2	31.1	
	まあそう思う	42.1	37.8	
	そう思う	23.6	20.0	
居住形態	非実家	31.5	28.9	n.s.
	実家同居	68.5	71.1	
父学歴	中高卒	12.0	51.1	***
	短大専門卒	5.1	4.4	
	大卒以上	73.6	26.7	
	DK/NA	9.3	17.8	
母学歴	中高卒	16.2	46.7	***
	短大専門卒	40.7	40.0	
	大卒以上	38.0	8.9	
	DK/NA	5.1	4.4	
父年齢	49歳以下	25.9	42.2	*
	50歳以上	67.5	44.4	
	DK/NA	6.5	13.3	
母年齢	49歳以下	42.1	71.1	***
	50歳以上	54.6	26.8	
	DK/NA	3.3	2.2	
母ライフコース	専業主婦	35.2	8.9	**
	再就職	46.8	66.7	
	両立	17.1	22.2	
	DK/NA	0.9	2.2	
本人年齢	平均	19.9	19.8	n.s.
	(SD)	(1.17)	(1.15)	
きょうだい数	平均	2.1	2.2	n.s.
	(SD)	(0.65)	(0.74)	

注：　***: p<.001, **: p<.0.1, *: p<.05

表２　理想のライフコース：出生動向調査との比較

%

	本調査		出生動向調査（2010 年）	
	女子大	看護専門		
	理想のライフコース		理想のライフコース	予定のライフコース
専業主婦	15.8	8.2	19.7	9.1
再就職	34.8	46.9	35.2	36.1
両立	34.8	36.7	30.6	24.7
DINKS	1.2	2.0	3.3	2.9
非婚就業	13.4	6.1	4.9	17.7

数の関連を確認する。その後、その他の変数を統制した多変量解析をおこなう。主要な分析は、本人の理想のライフコースを従属変数とした多項ロジット分析である。

4. 分析

まず母親のライフコースと本人の理想ライフコースとの関連を見ていこう（表 3）。母親が専業主婦である場合、本人の理想ライフコースが専業主婦である割合は 30％であり、この割合は母親が再就職、両立のケースと比べると最も高い。同様に本人の理想が両立である割合は 26.3％であり、母親が再就職、両立である場合と比べると最も低い割合となっている。ただし母が専業主婦のグループにおいて、理想のライフコースとして最も高い割合で選択されているのは再就職である（43.8％）。

母親が再就職である場合は、半数以上（55.0％）が、本人も再就職を理想としている。次いで多いのが両立であり（32.1％）、専業主婦が最も少ない（13.0％）。最後に母親が両立である場合を見ると、非常に高い割合で本人も両立を理想としており（85.1％）、専業主婦（6.4％）および再就職（8.5％）は 10％以下にとどまる。以上から、母親のライフコースと本人の理想ライフコースとの間には強い関連があると言えるだろう（χ^2=59.45, df=4, p<.001）。

つづいて父学歴と本人の理想ライフコースとの関連を確認する（表 4）。まず父学歴が中高卒である場合、大半の回答者は結婚出産後も何らかのかたちで就労を志向しており（再就職および両立が 93.9％程度）、専業主婦を理想とするグループは少数派であることが分かる（6.1％）。一方、父親が大卒以上の場合は、5 人に 1 人程度が専業主婦を理想としている（21.1％）。その他については、再就職（39.8％）と両立（39.2％）がほぼ同

表３　母親のライフコースと本人の理想ライフコースのクロス表

母親のライフコース	本人の理想ライフコース							
	専業主婦（％）		再就職（％）		両立（％）		計（％）	
専業主婦	24	(30.0)	35	(43.8)	21	(26.3)	80	(100.0)
再就職	17	(13.0)	72	(55.0)	42	(32.1)	131	(100.0)
両立	3	(6.4)	4	(8.5)	40	(85.1)	47	(100.0)
計（％）	44	(17.1)	111	(43.0)	103	(39.9)	258	(100.0)

χ^2=59.45, df=4, p<.001

表4　父学歴と本人の理想ライフコースのクロス表

父学歴	本人の理想ライフコース			
	専業主婦（%）	再就職（%）	両立（%）	計（%）
中高卒	3　(6.1)	24　(49.0)	22　(44.9)	49　(100.0)
専門短大卒	2　(15.4)	7　(53.8)	4　(30.8)	13　(100.0)
大卒以上	36　(21.1)	68　(39.8)	67　(39.2)	171　(100.0)
計（%）	41　(17.6)	99　(42.5)	93　(39.9)	233　(100.0)

χ^2=6.64, df=4, n.s.

じ割合である。

父学歴、すなわち出身階層ごとに本人の理想ライフコースは若干異なるが、仮説とは異なり、出身階層が高いほど、子の就労志向は低い傾向が見てとれる。ただし有意な関連は見られない（χ^2 = 6.64, df = 4, n.s.）。

以上、二変数の関連を確認することによって、仮説1と一致する傾向が確認される一方で、仮説2については、仮説と一致しない傾向が確認された。さて前述の通り、出身階層が高い場合、娘の職業的地位達成を志向する一方で、母親の就業が抑制されることが考えられる。よって、父学歴と母親のライフコースとの関連についてもここで確認しておく（表5）。これによると、父学歴に関わらず最も多いのは再就職コースである。ただし父親の学歴が高いほど、母親が就業している割合が低くなっており、一方で専業主婦である割合が高くなっている。以上から、父学歴と母ライフコースには有意な関連があり、子どもにとっては出身階層が高いほど母親が就業している割合は低くなると言える（χ^2=14.52, df=4, p<.01）。よって、父学歴は母親のライフコースには有意な効果を持つが、本人（子ども）の理想ライフコースについては出身階層によって直接規定されるとは言えず、母親のライフコースによって媒介されるとも言えない[3)]。

最後に他の変数を統制した上で多変量解析をおこなう。具体的には本人の理想ライフコースを従属変数とした多項ロジットを試みる。多項ロジットモデルとは、被説明変数が3つ以上の順序付けできないカテゴリーを持つ場合に用いられる解析法である。

表6が、多項ロジットの結果である。参照カテゴリーは専業主婦である。よって、それぞれ、専業主婦に比べて再就職のカテゴリーを回答する確率、および専業主婦に比べて両立のカテゴリーを回答する確率のロジットを示している。まず表の左側は（専業主婦に対して）再就職を理想のライフコースとして選択する傾向の規定要因に関する分析である。これによると、有意な効果を持つの

表5　父学歴と母親のライフコースのクロス表

父学歴	母親のライフコース			
	専業主婦（%）	再就職（%）	両立（%）	計（%）
中高卒	5　(10.4)	32　(66.7)	11　(22.9)	48　(100.0)
専門短大卒	3　(23.1)	7　(53.8)	3　(23.1)	13　(100.0)
大卒以上	66　(38.8)	75　(44.1)	29　(17.1)	170　(100.0)
計（%）	74　(32.0)	114　(49.4)	43　(18.6)	231　(100.0)

χ^2=14.52, df=4, p<.01

表６　本人の理想ライフコースを従属変数とした多項ロジット

	再就職（vs. 専業主婦）		両立（vs. 専業主婦）	
	Exp (B)	*S.E.*	*Exp (B)*	*S.E.*
切片	-1.811	3.634	-10.65 **	3.829
本人年齢	1.150	.180	1.800 **	.188
学校（ref: 女子大）				
看護専門ダミー	1.171	.653	.848	.676
きょうだい数	1.197	.284	.986	.304
居住形態（ref: 非実家）				
実家ダミー	1.383	.419	.835	.432
父年齢（ref: 49 歳以下）				
50 歳以上ダミー	.909	.478	1.036	.517
母年齢（ref: 49 歳以下）				
50 歳以上ダミー	.594	.465	.633	.499
父学歴（ref: 中高卒）				
専門短大卒ダミー	.670	.962	.317	1.093
大卒以上ダミー	.482	.556	.504	.579
母学歴（ref: 中高卒）				
専門短大卒ダミー	.581	.512	1.007	.548
大卒以上ダミー	.850	.545	.618	.601
母ライフコース（ref: 母・専業主婦）				
再就職ダミー	2.624 *	.405	2.434 *	.443
両立ダミー	.897	.838	18.431 ***	.723
-2logLik.	410.9			
Model χ^2 (d.f.)	89.4 (24)**			
AIC	462.9			
McFadden's R^2	.167			
N	260			

注：***: p<.001, **: p<.0.1, *: p<.05

は、母親のライフコースが再就職であることのみである。すなわち、母親が再就職である場合は、娘も（専業主婦であることよりも）再就職を理想として考える傾向が高いということである。非常に興味深いことに、同じ母親の就労であっても、母親が両立による一貫就労であることは、再就職という方式による就労志向には効果を持たない。つづいて表の右側は、（専業主婦に対して）両立を理想のライフコースとして選択する傾向の規定要因に関する分析である。ここでは母親のライフコースがともに有意になっている。母親が再就職であることおよび両立であることは、ともに本人の両立志向に正の効果を持つ。とりわけ母親が両立であることは、非常に強い効果を持つことが分かる。その他の変数について見ると、年齢が正の効果を持つ。年齢が上になるほど、言いかえると入学してから卒業が近づくほど、（専業主婦志向よりも）両立による就労志向が強まることが分かる。

以上の分析結果をまとめると、本人の理想ライフコースを規定する要因として、母親のライフコースが影響を与えていると言えるだろう。上述の仮説と照らし合わせると、仮説１が支持される。ただし本人の理想が再就職である場合については、母親の両立による就労経験は有意な効果を持たず、再就職による就労のみが有意な効果が見られた。

理想のライフコースは本人の性別役割分業に関

表7　性別役割分業意識を従属変数とした重回帰分析

	男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである		子どもが3歳くらいまでは母親は育児に専念すべきである	
	β	*S.E.*	*β*	*S.E.*
切片	3.273 ***	.900	4.260 ***	.995
本人年齢	-.090	.043	-.108 +	.048
学校（ref: 女子大）				
看護専門ダミー	-.116 +	.144	-.081	.159
きょうだい数	-.011	.074	.032	.081
居住形態（ref: 非実家）				
実家ダミー	.099 +	.106	.066	.117
父年齢（ref: 49歳以下）				
50歳以上ダミー	.114	.120	.040	.133
母年齢（ref: 49歳以下）				
50歳以上ダミー	-.174 *	.119	-.080	.131
父学歴（ref: 中高卒）				
専門短大卒ダミー	.080	.236	.044	.260
大卒以上ダミー	-.091	.127	.006	.140
母学歴（ref: 中高卒）				
専門短大卒ダミー	.017	.125	.013	.138
大卒以上ダミー	.172 *	.139	.031	.153
母ライフコース（ref: 母・専業主婦）				
再就職ダミー	.011	.113	.075	.125
両立ダミー	-.254 ***	.145	-.195 **	.160
R^2	.161***		.094*	
Adj. R^2	.120***		.050*	
N	259		260	

注：　***: p<.001, **: p<.0.1, *: p<.05, +: p<.1

する規範意識と密接に関連することが想定されるため、補足的な分析として、本人の性別役割分業意識を従属変数とした分析についても結果を示す。従属変数は「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」、「子どもが3歳くらいまでは母親は育児に専念すべきである」の2項目であり、それぞれの得点を連続変数として重回帰分析を試みる。得点が高いほど規範意識が高いことを示す。

分析結果は表7に示した。これを見ると、いずれの規範意識についても母親のライフコースが両立であることが、性別役割分業意識に負の効果を持つことがわかる。すなわち、母親が両立で就労している場合、娘は性別役割分業に対して否定的な意識を抱いているということである。注目すべきは、同じ母親の就労であっても、母親の再就職は有意な関連を示していないことである。以上の結果から、性別役割分業意識についても、前述の理想のライフコースの形成要因と同様に、母親のライフコースが有意な効果を持つことが確認できた。

5. 考察

分析より、娘の理想ライフコースを形成する要因として母親のライフコースが効果を持つことが示された。母親が両立の場合、娘が理想ライフコースとして、就業を含んだライフコース（再就

職と両立）を選択する傾向に効果を持っていた。一方で、母親が再就職の場合は、娘も再就職を理想とする傾向にのみ効果を与えていた。また、母親が両立である場合は、娘が性別役割分業に対して否定的な意識をもつ効果があることも確認された。娘の理想ライフコースおよび規範意識に与える効果の違いから、同じ母親の就業であっても再就職と両立は質的に異なることが示唆された。

本稿の分析においては、具体的にどのようなメカニズムを経て、母親のライフコースが娘の理想ライフコースに効果を持つと言えるのかについては分析が十分とは言えない。解釈として考えられるのは、先に述べたとおり以下の二つである。第一に、幼少期からの社会化の影響である。母親のライフコースとは、育児期の子どもとの関わり方の証左であり、娘から見れば、自身の幼少期の母親との関わり方に他ならない。このようなライフコースのごく初期における経験が、その後のライフコースに影響を与えているのかもしれない。第二に、現時点における母との親密性である。すなわち、青年期において親密性が高いことが、母親をロールモデルとして捉える傾向を日常的に強化していくという説明も可能だろう。おそらく両者の相関は高いことが考えられるが、前者は親密性、すなわち現時点における母娘関係の良好さを要件としない点が特徴的である。前者については本調査で利用可能な質問項目がないため、確認することができない。そこで補足的な分析として、後者のメカニズムと矛盾しない結果が実際に得られるのか確認を試みた[4]。結果としては、現時点の親密性が与える、母親のライフコースと本人の理想ライフコースとの一致／不一致への影響は、本データからは確認することができなかった。換言すると、現時点の母娘関係の親密さとは無関係に、ライフコースのごく初期から規範が形成され、それらの規範にもとづいた理想ライフコースが形成されており、母親のライフコースを肯定的に評価していることが示唆される。

さて先に研究課題として述べたとおり、理想のライフコースに着目する上で見据えておくべきことは、理想の形成要因の解明と、理想と現実の一致／不一致に至るメカニズムだろう。これに関して二点指摘しておきたい。

第一に、理想が形成される文脈の理解についてである。現実の女性のライフコースの多様性、言い換えると有配偶女性の就業形態の多様性が生み出される要因としては、本稿で取り上げたように女性の意識（選好・志向）を重視する考え方がある一方で[5]、社会の構造を重視する考え方もある。女性のライフコースを研究対象とするにあたっては、意識と構造のいずれか一方に着目するのみでは不十分であり、労働力需要側（企業など）の意向と労働力供給側（有配偶女性）の意識・行動とのマッチングの問題が主題化されるべきである（木村 2000）。ここで言う社会の構造とは、とりわけ性別と結びついた形での労働市場の分断による就業選択のことを指し、具体的にはフルタイム労働市場とパートタイム労働市場との分断によって有配偶女性の就業選択の多様性がもたらされている、とも言えるだろう（木村 2000）。さらに近年の長期化する不況の影響を受けて、未婚女性の正規雇用率は、90年代後半以降低下を続けており、未婚女性の3分の1が非正規雇用であり、10％近くが無職である。男女格差は縮まったが、女性どうしの格差が広がり、それを制度が後押ししているという指摘もある（山田 2009）。近年の意識調査等において、若年女性における性別役割分業を肯定する傾向の高まりや専業主婦志向の復活を、若者の「保守化」の一端と理解するのは十分ではなく、社会的分断にもとづいた志向の形成と解釈する方がより適切と言えるだろう。いずれにせよ、女性の就業形態の多様性は意識と構造の

相互作用によって規定されるということ、そして意識は労働市場の分断や社会階層などの社会構造と独立して形成されるわけではなく、それぞれの文脈に応じて理解する必要があることを理解しておく必要があるだろう。

第二に、理想と現実の不一致がもたらしうる影響についてどのように考えることができるだろうか。本稿では、母親のライフコースの強い影響が確認されたが、今日において親のライフコースをモデルとすることには限界があり（岩上 2013）、描いた理想が実現できるとは限らないことは言うまでもない（鈴木 2012）[6]。その場合この理想と現実の不一致は、個人にとって抑圧や不満として経験されるのだろうか。木村（2000）は、1995年SSM調査データにおいて、学歴水準と性別役割意識には負の関連がある一方で、主婦専業度の高さと性別役割意識には正の相関がみられることについて、以下のような解釈を試みている。もともと性別役割分業意識に否定的で、職業的地位達成の手段として四年制大学に進学し、就業継続を希望していたにもかかわらず、結果としてフルタイム労働市場での就業継続がかなわず専業主婦になった場合に、認知的不協和を経験するが、これを低減しようとする圧力の結果として、現在の自分の就業状況を合理化するような方向に性別役割意識が変化すると解釈している。同様に稲葉（2004）も、有配偶女性のうち、家事・育児について親族ネットワークに恵まれず、職業生活との両立よりも退職を選択した者たちが、「専業主婦であること」に強い不満を有しているわけではない調査結果の解釈として、個人が自分自身の強固なアイデンティティに基づいて生活を構造化していくのではなく、生活の変化にあわせて役割アイデンティティの構造を変化させ、適応している姿を見出しており、このような構造が日本の有配偶女性に偏在するものであれば、既存の家族構造に変化は起こりにくく、維持される側面が大きいと指摘している。両者は女性が出産を契機として意識と行動を再構造化する可能性について指摘している点で共通している。よって、理想や選好などの意識は発達的変化を遂げるものであることを前提とし、それらがライフコースを通じてどのように移行する／しないのか、移行の要因も含めて今後検討される必要があるだろう。そしてこれらの意識および行動の変化にアプローチするためには、インタビュー調査などに基づく質的な研究手法がより強みを持つ領域であると言えるだろう。

最後に本稿の限界について指摘しておく。第一に、本稿で用いた分析データは非確率抽出による標本であり、データとしての質は高いとは言えない。中高卒の女性や共学校の女性も含まれておらず、この点は不十分である。今後は本稿で得られた知見について、全国大規模データで再確認していく必要があるだろう。第二に、データ上、決して少なくない非婚就業およびDINKSを理想とする女性の特性、および理想の形成要因については分析の枠組み上、触れられていない。近年の未婚化や少子化というマクロな動向について理解する上で、これらのグループの動向について無視することは得策ではない。今後さらなる分析を試みたい。

文献

Chodorow, N. (1978) *The Reproduction on Mothering*, University of California Press（= 1981, 大塚光子・大内菅子訳『母親業の再生産』新曜社.）

Gilligan, C. (1982) *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press（= 1986, 岩男寿美子訳『もうひとつの声：男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店.）

Hakim, C. (2000) *Work-lifestyle choices in the 21st*

Century: preference theory, Oxford University Press.

稲葉昭英（2004）「夫婦間性別役割分業の構造と変動：家族変動論と家屋構造論の接合に向けて」『三田社会学』9：45-77.

岩上真珠（2013）『ライフコースとジェンダーで読む家族〔第3版〕』有斐閣.

岩澤美帆（1999）「だれが『両立』を断念しているのか：未婚女性によるライフコース予測の分析」『人口問題研究』55(4) : 16-37.

木村邦博（2000）「労働市場の構造と有配偶女性の意識」盛山和夫編『ジェンダー・市場・家族』（日本の階層システム 4）東京大学出版会 177-192.

国立社会保障・人口問題研究所（2012）『第14回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）第Ⅱ報告書：わが国独身層の結婚観と家族観』.

村松幹子（1994）「女子学生のライフコース観の形成：親の影響を中心に」『年報社会学論集』7: 85-96.

――――（2000）「女性学生のライフコース展望とその変動」『教育社会学研究』66: 137-155.

中井美樹（2000）「若者の性役割観の構造とライフコース観および結婚観」『立命館産業社会論集』36(3): 117-126.

中西泰子（2006）「母娘関係の親密さとその規定要因：娘のライフコース志向と母親ライフコースの類似性に注目して」『家族関係学』25: 52-60.

佐野まゆ・高田谷久美子・近藤洋子（2007）「大学生における性役割志向によるライフコース観の比較」『山梨大学看護学会誌』6(1): 45-52.

鈴木富美子（2012）「ライフコース選択に揺れる若年女性たち：雇用の不安定化と晩婚化・非婚化の中で」『東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ』63.

山田昌弘（2009）『なぜ若者は保守化するのか：反転する現実と願望』東洋経済新聞社.

註

1） 中西（2006）は、母親のライフコースと娘のライフコース志向が一致する場合、母娘関係の情緒的親密さが高まることを指摘している。

2） 先行研究では、性別役割分業規範意識とライフコース志向の密接な関連が指摘されている（村松 2000; 中井 2000; 佐野ほか 2007）。

3） ここでは、XがYに有意な効果がある場合（X→Y）において、第三変数ZがYに有意な効果を持ち（Z→Y）、Zを投入することでXのYに対する効果が消失する場合、XがZに媒介される（X→Z→Y）、と考える。

4） 具体的には、母親のライフコースと本人の理想ライフコースとの一致／不一致を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析をおこなった。説明変数として、母親との会話頻度、同伴行動、トラブルやもめごとの有無、相談サポートの利用可能性、相談された経験の有無、尊敬の有無、などを設定したが、いずれも有意な関連は確認できなかった。

5） 例えばハキムは、欧米における就業と家庭生活のバランスをめぐる女性内分化をもたらす要因として、ライフスタイルについての女性自身の「選好」を重視する、「選好理論（preference theory）」を提示している。ハキムは女性のライフスタイルを「適応型女性（adaptive women）」、「仕事中心型女性（work-centred women）」、「家庭中心型女性（home-centred women）」の三つに分類している（Hakim 2000）。

6） 岩澤（1999）は、理想ライフコースと予定ライフコースにおける一致／不一致のうち、両立を理想とする女性に着目し、両立を実現および断念する諸要因について明らかにしている。両立実現に向かわせる要因としては、「官公庁勤務」、「昇進の見込みあり」、「母親が両立」などが有意差を示した。一方、「母親が専業主婦」、「大企業勤務」な

どの場合は、専業主婦を予定していた。このように、（理想ライフコースだけではなく）予定ライフコースについても母親のライフコースが効果を持つことが指摘されている。